つばさの皆様

二月から新型コロナの影響で
長いさお休みして、ますがお変り
ありませんか？
毎日新聞にソプラノ田中さんの投稿はがき随筆
を見て励まされました。最後の元気で会い
ましょうね 皆さん！ 早速そこに通ってます。
水のいのちの高田三郎先生の文章の
コピー同封します。
是非読んで下さい。

高下知子

毎日新聞
2020.4.18

はがき随筆

合唱団

車に乗るとCDを聴く。クリスチャンである作曲家の高田三郎さんの合唱曲「水のいのち」。最近のざわざわした気持ちが、すうっと静まっていく。

このCDは、私の入っている合唱団の秋の定期演奏会の曲で自分で練習するためにもらったものだ。皆で集まる練習は、もちろんお休み中である。平均年齢79歳という混声合唱団、皆お元気にされているだろうか。

入団して1年。声がぴったりとハモった時の快感や、演奏会の満足感、そして素敵な人たちと会え、生活の一部になっていた。また状況が良くなったら元気で会いましょうね。皆さん。

小倉南区企救丘
田中 裕子(60)

2020.4.18

組曲《水のいのち》

あのころ私は既に、この組曲《水のいのち》の中の〈海〉を書き上げていた（これについては私は、随筆集『くいなは飛ばずに』の中の「ある出会い」に相当詳しく書いている）。

そんなある日、TBS放送局から中西さんが来られ、私に芸術祭番組の合唱組曲の作曲委嘱についての申し入れがあり、私は「この〈海〉を入れ、あとの楽章の詩についても私の考えどおりにしてよければ」と答えたのであった。中西さんはすぐ局に戻り、その日のうちに折り返して「その条件で」との電話があり、こうしてこの作曲は出発したのであった。

当時、電車の駅やホームの壁に張り付けられた映画のポスターなどは、まことに目に余

るものがあった。肉体というものをあのように露骨にさげすみ、低劣、低俗なものとして扱い、それがまたあのように氾濫し、当たり前のことになっているのを、ただ顔をそむけているだけでよいのかと私は思った。ひとりの力は小さくても、ただひとりでも、これに対抗しようと思ったのである。

人の肉体はよいものであり、もっともっと大切にされなければならないのであるが、人にはまた精神というものもあり、その精神が賛成しているのでなければ、どのような生き方をしても、人はそれに満足することができない。その「精神」に目と心を向けてもらうために、この〈海〉を含む合唱組曲を書こう、と私は決めたのであり、あの時TBSに了承を得たのもこのことを想定しての条件であったのだ。

まず、私は高野喜久雄さんに電話し、私の考えを話し、彼の詩集『存在』の中から、すでに狙いをつけていた〈水たまり〉と〈川〉を「読む詩」から「きいてわかる詩」になおしてもらうことを頼んだのであった。

それらが送られて来、そして作曲を了（お）えたのち、第一曲〈雨〉を、そしてそれも了えたのち、終曲のための長い詩〈海よ〉を書いてもらうという順序で運んでいったのである。

第一曲〈雨〉

第一曲〈雨〉は「降りしきれ　雨よ」と始められる。そして「すべて立ちすくむものの上に」と。

私たちはこの世で、いったい何度立ちすくむことだろう。今年もまた目指す学校の入試の発表に名前の出ていなかった娘。昨日から家に帰ってこない息子。旅行先で交通事故に遇った夫の重態の知らせ。私たちはその度に断崖の突端に立たされ、目の前が真っ暗になってしまうのではないだろうか。

「また横たわるものの上に」と続く。それは何という安らかさ。全く安らかに眠っている人。

そして、「すべて許し合うものの上に」と。許し合うことこそ平和の始まりであり「一日のうちに七回の七十倍許せ」と聖書にも書いてある。しかし、それでもなお且つ、人はどうしても許すことのできない相手を持っていたりもするのではないだろうか。詩は続いている。

「また　許しあえぬ者の上に」と。

私たちが「降りしきれ　雨よ」と歌うのは、歌っている私たちの上に、ではなく、「これ

らすべて立ちすくみ、許し合い、また許し合えぬ人びとの上に、恵みの雨よ」との願いをこめながら歌い始めるのである。そして、涸れた井戸も、踏まれた芝生も、ことごとくも、なお、ふみ耐える根も、すべてそのもの自体に返されることができるようにと。

第二曲〈水たまり〉

どこにでもある、そして、やがて消え失せてゆく水たまりが「わたしたちに肖ている」と気付いた時、私たちは胸を突かれる思いを持つ。水たまりに過ぎない私たちの深さ、それは泥の深さでしかないし、私たちのちぎり（約束）も、それを受け入れるうなずきも、そして、まどい（団欒）もみな泥と泥の間のことでしかないのだ。

しかしまた、その水たまりが青い空を、その小さい水面に映しているのに気付き「私たちの小さな心もまた」と思うのである。

ついでながら、この詩に出てくる右記の「やまとことば」の『ちぎり』あるいは、『まどい』などを私たちは大切にしたいものである。これらこそ、聞いてわかる、そして詩情に満ちた美しいことばだからである。

第三曲〈川〉

「何故　さかのぼれないのか？　何故　低い方へ？」それは川にであると同時に、私たち

自身への詰問でもあるのだ。

そして、太い旋律線が生き生きと流れて行く。豊かな、そして透きとおった水をたたえた川のように。よどむ淵も、渦もいらだっているようだ。川がこがれているのは山であり、その切り立つ峰であり、その彼方の青い空なのだ。川底の石も水の流れに作用されて上流へと転がりのぼり、魚も力強く水中をさかのぼっていく。それら、川上へのぼろうとするものすべてをみごもっている川が何であるかと尋ねることはもういらない。それは私自身なのだ、と繰り返してこの楽章は結ばれる。

第四曲〈海〉

ピアノの音とともに始まるハミングの大波小波は、終始私たちに「見なさい　これを見なさい」といい続けているようである。「人でさえ行けなくなれば、そなたをさしてゆく。そなたの中のひとりの母を」と続く。

最後の波の音「見なさい」は、大海が人類全体に詰問しているように歌うべきなのではないだろうか。

第五曲〈海よ〉

すべて受け容れる大きな海、うまず繰り返す無限の海、その海の中の光るものを求めて

私たちは海の月(くらげ)、海の星(ひとで)、真珠を抱くあこや貝、そして暗い深海におけるプランクトンの死骸の堆積によってできた真白なマリンスノーの、上へ向かっての立ち昇りに出会うのである。

たえまない始まりである海は、空の高みへの始まりなのだ。「のぼれ　のぼりゆけ」と私たちが歌う時、のぼりゆく「水のこがれ　水のいのち」が、歌う人、きく人を包み込んでくれるであろうか。

この《水のいのち》を、これらの楽章の配列から、「水の一生」と考える人が多いようである。英訳すれば“The Life of Water”である。しかし私は、この題のほんとうの訳は“The Soul of Water”と思っている。

“Soul”すなわち「魂」とは「それがあれば生きているが、それを失えば死んでしまうもの」なのである。

そして、水の「魂」とは、低い方へ流れていく性質のことではなくて、反対に「水たまり」は「空を映そうとし」、「川」は「空にこがれるいのち」なのであって、それはまた、私たちの「いのち」でもあり、この組曲の主題でもあるのだ。

こう考える時私は、同じ詩人の『蠟燭』という詩の中の二行「焔はなぜ天を指しつつ、焔はなぜ下へと燃えうつるのか」を思い出さずにはいられない。揺れる焔となって自らを燃やしながら刻一刻自らの影に近付き、やがて燃え尽きる蠟燭のその焔は、かつて横を指したことも、下を指したこともなく、遂に燃え尽きる最後の瞬間まで天を指し続けるのである。そしてそれこそは「水のいのち」であり、私たちの心のすがたでもあるのではないだろうか。

この作品は、一九六四年十一月十日、合唱・日本合唱協会、指揮・山田和男（一雄）により、TBSから放送初演されたが、その二日後、作曲家の清水脩さんから手紙をもらった。彼はそのころカワイ楽譜の社長でもあり、その中には「この作品は是非カワイで出版したい」という強い要請が書かれてあった。そしてまたその二、三日ののちには、同じ社の遠藤治さんが来られるという速い事の運びが続いていった。楽譜はこのようにして出版されたが、宣伝らしいことは、どこでも、誰にも全くしてもらわないまま数年を出でずして北海道から沖縄までひろく歌われるようになっていった。それはただ、この曲を歌いたいと望んだたくさんのコーラス・メンバーと、ききたいと望んだたくさんの聴衆によってであ

った。

楽譜はカワイ出版に受け継がれ、混声、女声、男声を合わせると、重版数は一九九六年十一月現在、通算百七十七刷となる。カワイの上野部長によれば「日本における楽譜の安易なコピーの習慣を加算すれば、実数はこの十倍」とのことであった。

日本では、事を決めるのに自分でではなく、他者に決めてもらうことが多い。音楽などは、作曲も演奏もほとんど欧米における評判によって決まっているようだ。しかしこの《水のいのち》の評価については、はっきり日本人自身が決めてくれた。これは私にとっても、日本人全体にとってもうれしいことと思うのである。

この曲を書く決心をした時は、笑い者にされるのは覚悟していたことだった。「時代錯誤」「ご清潔」「堅物」などと。しかし何を忍んでもやろうと決心してとりかかっただけに、その後の成りゆきは私にとって驚きの連続であった。

ともあれ、このような内容の曲は、世界中に今も昔もない。解りやすい詩とは全くいえないし、楽しい音楽では決してない。「あの人たちは、私と同じことを望んでいてくれるのだ」と自分にいいきかせてはいるのだが、やはり私は今も驚いたままでいる。

録音は数多く出ているが、ここにはその中で、私自身の指揮によるものだけにとどめる

錨をやすむる能わざるか？

（新仮名づかいに改め。以下同様）

今にして思えば、生命はありあまるほど持っていた年ごろであったが、この詩は、いたく私の胸を打った。

詩は、過ぐる年にエルヴィールによって語られた宝石のようなことばの回想と、時劫の非情とをうたった後、次のように結ばれていた。

あわれ、湖水よ、無言の巌よ、洞窟よ、小暗き森よ！
時劫によりて変わることなく、はた時劫によりて若やぐ汝等よ、

あわれ、美わしき自然よ、
せめてはわれらのこよいの追憶をたもてよ！

と、そして、最後に、

かくてむせび泣く風、嘆息する蘆、
湖水の匂わしき大気のかおり、
これらすべて見え、聞こえ、呼吸づくこの地の一切のものが、
せめては「かれら嘗て愛しあいぬ」の一言をつねにつねに呟かんことを！

と。

後年、私はフランス語を勉強し、やがて、この詩、"Le Lac"をも読んだ。原詩の味わいはまた胸躍るものであった。そして、この最後の行のかっこ内の言葉が"Ils ont aimé"であることを知った。

私は、山野が好きである。就中、湖水が好きで、その岸辺をよく散歩する。

いつのころからだったか、岩に腰かけて、静かな波の音をきいていると、それが、Ils ont aimé（イルゾンテメ）ときこえるようになった。もとの詩には「一切のものが」となっているが、私には特に、波の音がそうきこえるのだった。そして、それは、何かの拍子にそうきこえはじめるのだった。「おや、またやってるな」と気付くような調子で。

やがて、海辺でもそうきこえるように思われ始めた。夕なぎの静かな波は、やはり、同じことばを繰り返しくりかえしいっているようだった。

フランス語の美しい響き、彼等の恐らくは最もよく使う、そして親しみ深いことば"aimer"。それを波の音の中に、いつもいつもきいているうち私は、日本の詩人は、この波の音をどうきくのだろうと思い始め、やがて、その方が次第に強くなっていった。

詩人にこのようなことを頼んだりすれば、わざとらしくなるだけと思った。私はただ永く永く、探し続けることにした。

エッソ・スタンダード石油の発行している『エナージイ』という出版物が私のところへも時どき送られて来ていた。一九六四年始めころのは「海」の特集である。その中では、海について科学的に、歴史的に、また、文学的にいろいろな記事が出ていたし、多彩な執筆者によるなかなか興味深いものだった。

深海のめずらしいいくつかの写真から、紀伊国屋文左衛門についての記事まであった。その中に、美しいカラー写真とともに詩の印刷してある見開きが十一ページも続いていた。写真もすきな私は、両方にひかれながらページをめくっていった。

もう前から知っている詩もあったが、そのあるページに、技巧をこらした『白魚をとる

船』と題する美しい写真とともにあった詩は、次のように始まっていた。

空をうつそうとして
波一つなく凪ぐこともある
岩と混じれなくて
ひねもす　たけり狂うこともある

しかし　凡ての川はみな
そなたをさして常に流れた
底に沈むべきものは沈め
空にかえすべきものは、空にかえした

これはいいなと思いながら私は読んでいった。詩はさらに続いて

人でさえ　行けなくなれば

そなたを　さしてゆく
そなたの中の　一人の母をさしてゆく
そして　そなたは
時経てから　充ち足りた死を
そっと岸辺にうち上げる
みなさい
これを　見なさい　と広いたげに

最後の二行を読んだ時、私は、「これではないかな？」と思った。

私は、感ずる速度がおそく、何回も読んで詩に近付くのが常なのだが、この時ばかりは頭が熱くなった。

「待っていた言葉はこれか？」

「これでいいか？」

私は、繰り返しくりかえし読んでみた。

しかし、詩人の名を見た時はまた、それにおとらずホッとした。高野喜久雄であった。

しかも、そのころ、すでに彼からもらっていた詩集『独楽』のなかにおさめられている「海」という詩なのだ。

作曲家と詩との出会いは、いつも少し運命的なにおいがする。

詩集についても、同じ詩集を何回もよんでいるうち、驚くような発見があるものだ。だから私は、もうこの中には私の作曲に向く詩はないと思った詩集もまたとり出すことをやめない。その上、作曲にとりかかってからもまた、そのことばの別の魅力を見出すこともあるくらいだから。

ともあれ、日本の海はずいぶんきびしいことばをいい続けていることになるわけだが、今のわれわれを見ていたら、日本の海は確かにこうもいうであろうとも思った。

それらすべてをこめて私は、ある音型をこのことばにあたえ、また、その音型をハミングにより曲の最初から使用することにした。波の音を暗示するものとして。

これが、『水のいのち』の第四曲「海」の成り立ちである。

なお、この中にある「そなたの中の一人の母をさしてゆく」では、三好達治の詩『郷愁』の中の一節。